

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 新本 万里子

【所属】（助成決定時） 広島大学大学院 社会科学研究科 国際社会論専攻

【研究題目】

パプアニューギニア、アベラム社会における伝統的「家族計画」の消滅と身体観・子ども観の変容

【研究の目的】

近年パプアニューギニアでは、急激な人口増加が問題となっており、エイズ問題も深刻になっている。報告者は、2002年から東セピック州で調査を進めるなかで、植民地時代には避妊と墮胎の民俗知識・技術とともに、「子どもを間隔をおいて産む」慣習があったこと、月経小屋（月経中に籠り、出産も行われた）が存在していたことを聞き取っており、急激な人口増加とエイズ問題の原因が、伝統的な「家族計画」が消滅したことと関係があると考えた。そのため、本研究では、伝統的な「家族計画」の消滅と、それに関わっておこった身体観・子ども観の変容の全体像を明らかにすることを目的とした。

伝統的な避妊や墮胎、出生間隔の調整が具体的にはどのように行われていたのか、夫婦の性と生殖に、どのような親族やコミュニティの力関係が関わっていたのか、具体的な「家族計画」の内容を明らかにし、その変容の原因を究明することを目的とした。

【研究の内容・方法】

調査地・調査期間： パプアニューギニア国 東セピック州 マプリック地区 N村

2009年8月1日～9月13日に、人類学的フィールドワークによる現地調査を実施

調査の内容と方法：

①伝統的「家族計画」の内容と、その衰退の原因を明らかにするための調査。

高齢者を中心に、必要に応じて、若い世代に広げてインタビューを行った。インタビュー項目は、妊娠をどのように知ったか、なぜ妊娠すると考えていたかなどの民俗生殖理論、出産の介助者・体位・後産の処理の技術、出産後の儀礼、避妊・墮胎に関する信念、親族やコミュニティとの関わりである。

②独立後～現在の出産の実態についての調査。

子どもの出産場所と介助者、避妊の経験の有無について、N村の出産経験のある女性の約半数に聞き取り調査を行った。出産の具体的な方法や墮胎の経験などについては、任意に数名の女性を選んで聞き取りを行った。

③NGO、病院、教会との関わり方の把握をするための調査。

NGO（East Sepik Council of Women）の進める「家族計画」の実態を把握するため、NGO関係者に聞き取りを行った。この中で、病院との提携についても聞き取りを行った。調査を進める中で、カトリック教会の団体も「家族計画」を推進していることが分かり、この団体の関係者に聞き取りを行った。

【結論・考察】

ヤムイモを主な栽培作物とする焼畑農耕を営むこの地域では、ヤムイモの栽培をめぐる性の禁忌観が強く、月経を不浄視していた。出産は、親族や近所の女性たちによって、月経小屋で行われていた。1930年代に政府によって病院が開かれ、1950年代後半以降その規模が拡大された。オーストラリア人の医師と看護婦が滞在し診察を行うとともに、村々の巡回診療も行った。月経小屋での出産が危険視され、病院出産が勧められた。近年は、病院、NGO、カトリック教会による「家族計画」も推進されている。現在、若い女性たちに村での出産が危険だという意識が強まっており、病院出産が増加する傾向にある。この過程で、ヤムイモと性との禁忌関係と、女性の月経に関する不浄観が弱まってきている。単に衛生状態や栄養状態が改善しただけではなく、ヤムイモと性との禁忌観が薄れたことも、人口増加の一因だと考えられる。